

# 学長 インタビュー

琉球大学  
いわまさ 岩政 学長  
てるお 輝男 学長

## 沖繩の歴史や文化に根差し 海からの視点で教育・研究を推進する

国立大学法人琉球大学は一九五〇年（昭和二十五年）、戦火で焼失した首里城跡地に米国軍政府の所管のもと英語学部、教育学部、社会学部、理学部、農学部、応用学芸学部の六学部で創設されました。開学以来、米国ミシガン州立大学の指導を受け、研究成果を地域に還元させ地域に貢献する大学を目指してきました。

一九六六年（昭和四十一年）に琉球政府立となり、一九七二年（昭和四十七年）に沖縄の本土復帰とともに国立大学になり、本年創立六〇周年を迎えました。

今回のインタビューでは、琉球大学の開学以来の精神と将来構想、特色ある教育と研究を中心にお話を伺いました。

### 垣根のない海からの視点で「地域性」と「国際性」を追求する

——琉球大学の開学以来の精神についてお伺いします。

**学長** 大学の開学時、「琉大顧問」のチャップマンからは学部ではなく六学科にすることや、さらに日本文学科はつくらないといった意見が出され、ずいぶん紆余曲折がありました。詳しく話すと長くなりますので質問にお答えすることになります。本学の目標のキーワードは「地域性」と「国際性」です。さらに先

の大戦で様々な大変な被害を受けたことなどから「平和」が目標になっているのが特長です。もちろん、毎日の講義がすぐに平和と結び付くわけではありませんが、いろいろ工夫しながら大きな目標としています。

本学の地域性と国際性は、ほかの大学とはかなり違うと思います。沖縄の歴史や文化に根差しているからです。沖縄は、昔から東南アジア諸国と貿易を行い、その富をもとに琉

のです。

### アジア・太平洋全域にわたる 広い視野を持った研究を

**学長** では具体的に何をやるかということですが、われわれが住んでいるこの地域の自然や歴史や文化など様々なものの重要性が浮かび上がってきます。この地域から出てきたものが世界的に評価される。それが一番大事だと思いい、世界的に認めてもらうために取り組んでいます。

例えば文系は、沖縄の歴史、文化、社会、経済、移民や言語などの研究に取り組んでいて、インターナショナル・ジャーナルを発行し世界的に成果を発信しています。エディトリアルボードメンバーには多くの外国の方も加わって、非常に高いレベルにあります。さらに国際沖縄研究所を設立しました。多数の

研究者によるアジア・太平洋全域にわたる広い視野を持った研究を進展させています。理系は、全国共同利用施設である熱帯生物圏研究センター（熱生研）で、サンゴ礁や沖縄の生物多様性などの研究を推進しています。

さらに、沖縄の自然環境に関する問題では、

### 新しいリベラル・アーツで学部と大学院を連携させる

——琉球大学の将来構想についてお伺いします。

**学長** 自分たちで新しいものをつくるのが大事だと思っています。例えば、国際沖縄研究所や熱生研での研究をはじめ、様々な先端的な問題についての仕事を通じて将来図はかなり見えています。そこで見えてきたもの

琉球王国ができたと言われていました。大陸の周囲の広い海にある島々のなかの国として、琉球王国は重要な位置を占めていました。海の側から見ると沖縄は本土や中国やアメリカの周縁ではなくて、中心であったわけです。

沖縄の人たちは今、世界中に広がって活動しています。国際性という言葉は国と国に垣根がある言葉だと思えます。沖縄からは広がりとして見えています。戦後、沖縄では高等学校を出ると国費留学生として本土の大学へ進学しました。早く帰ってきて県のために役に立つよう言われていたこともありましたが、多くの者はすぐに帰ってきました。他方、外国に行った者たちは、大学院まで出て帰ってきています。外国に対して、国と国が別々で国境がある、垣根があるという感覚ではなくて、垣根のない広がりとして海からの視点でものを見ています。本土と沖縄は、その感覚に差があるように思います。つまり、われわれが取り組んでいるのは、垣根を取り除いた広い世界、海から見た視点での国際性、地域性な

台風をはじめ沖縄には地滑りを起こしやすい土質など様々な問題があり島嶼防災研究センターで研究を進めています。実際に災害が起これば、行政の仕事になりますが、災害の発生時や防災などに役立つ研究を大学として推進しています。こうしたことなどによって、地域性と国際性を推進しています。

を先ほど言いましたように、陸からの視点ではなく海からの視点で具体的にしていくということ。これから具体化された成果が上がってくると思います。

——「二十一世紀 知の津梁」として琉球大学の第二期の中期目標・計画を示していますね。

**学長** ええ。「津梁」というのは懸け橋ということであり、世界中に広がっていくということ。沖縄の人は世界に広がり「ウチナンチュ（沖縄の人）ネットワーク」をつくっています。来年は「第五回世界のウチナンチュ大会」というイベントも行われますが、そういう広いネットワークを活用して視点を変えた新しい学をつくり、さらに経済の仕組みを考えることを行っています。

### リベラル・アーツと 教養教育はまったく違う

——琉球大学の特色ある教育と研究について



岩政 輝男 学長

昭和17年2月25日生まれ  
昭和41年4月 熊本大学医学部卒業

昭和51年11月 熊本大学医学部 助教授  
55年12月 琉球大学教授（文部省設置審）  
59年4月 琉球大学教授  
平成12年4月 同 医学部長（平成16年3月任期満了）  
17年6月 同 副学長、財務・施設・医療担当理事（平成19年5月任期満了）  
19年6月 琉球大学学長

お伺いします。

**学長** 本学は一九五〇年にミシガン州立大学の指導の下に創立されて、そこで行われた教育が、いわゆるリベラル・アーツ教育です。本土復帰後、いわゆる教養教育に様変わりしました。リベラル・アーツと教養教育はまったく違うものです。アメリカのランドグラント大学（土地付与大学）は、ほとんどがリベラル・アーツを行っています。しかし、それぞれの大学でやり方が違います。リベラル・アーツは、学生が自分で問題を見つけ、自分で解決方法を考え、自分で解決するという、いわゆる自主性が大事です。

リベラル・アーツと教養教育でまったく違うところは、リベラル・アーツは大学院に入るための教育だともいえます。つまり、大学一、二年次のいわゆる教養教育と専門教育が別々に分離しているのではなく一貫した教育を行います。さらに大学院で学ぶことが大切になってきます。

日本の場合、教養教育があって、専門教育があって、さらに教養教育と専門教育のつながりがはつきりせず、大学設置基準が大綱化されて以降、多くの教養部が廃止になったわけですが、主に企業から学生の学力が足りないという意見が出ています。専門教育と教養教育が分かれていて、三年生になり専門教育が始まって間もないうちに就職活動ということになるわけですから、専門の学力が不足しているという指摘はむしろ当然のことだと思います。

—— 学長の話が出ましたが、大学には出口

## 「社会人入学」ではなく生涯を通じた勉強へ

**学長** 十八歳で大学に入って二十二歳で卒業する、医学部は二十四歳ですけれども、そういうパターンの定着に問題があると思います。やはり生涯を通じて勉強する必要があるのだと思いますね。ですから入学も十八歳である必要はなくて、二十歳でも三十歳でもよいと思います。

諸外国では学生の平均年齢は日本よりはるかに高く、生涯を通じて勉強する人が多いようです。日本では「社会人入学」と言っていますが、諸外国では当たり前のことです。ですから、「社会人入学」という言葉は外国語に訳せないんですね。

日本の場合には卒業すると大学での勉強はにおいて、必要なことは企業で教えるという慣行がありました。大学の教育と企業の教育が別になっています。それで大学は象牙の塔で役に立たないという話になってしまい、生涯を通じて勉強するというパターンが生まれていないのだと思います。

大学の勉強が役に立たないというようなことではありませんので、そのシステムを変えていく必要があると思います。外国の方が本学によく来ますけれども、外交官の方などは、ほとんどがMBAやPh.D.を持っていたり、知的なレベルが高く、それがまた実務に役立つ

## 大学院までの一貫教育を目指す

**学長** 本学では新しいリベラル・アーツとして、琉大グローバルシテイズン・カリキュラムというものを始めました。これは今言った趣旨に沿っていて、学部専門教育としっかり連携させて、入学したばかりの一年次から四年次、さらに大学院教育まで結び付けています。基本にあるのは、学生が自分で問題を見つけ、考え、解決するということです。

いわゆる教養教育と学部の専門教育や大学院教育の結びつきをはつきりさせるために、目標になっているものが何であるかを明確に学生に提示して学んでもらいます。

一貫教育として考えたときに高等学校の段階から大学に結びつく教育が必要なはずで、高等学校の先生たちとその話をすると、皆さんは「そうだ、そうだ」と言っています。しかし、高等学校側の関心はやはり大学受験にあるようで、なかなか進展しませんね。

—— 琉大グローバルシテイズン・カリキュラムは、先ほどの海からの視点で考えているわけですね。

**学長** そうです。国という垣根をつくって、学問や教育の世界では良いものが出て来ないのではないかと思っています。

先日、ニューヨークから帰ってきたのですが、実はアメリカ行きは久しぶりでした。コロンビア大学に行ったのですが、驚いたことがあります。というのは、以前は大学や専門

管理が求められていますね。

ているわけです。

## 大学は役に立つ 創造的な知恵の提供を

—— 大学入学者の十八歳人口への偏りは問題ですね。

**学長** 生涯を通じて勉強することを考えると、あえて「社会人入学」という言葉をつくらなければならぬこと自体がおかしいのだと思います。社会に出て様々な仕事をしている過程で、もう少し勉強したいという要望が出てくるはずで、その要望に大学が応えて役に立つ創造的な知恵を提供していく必要があると思います。

それと、ただ役に立つのかとか、どれだけ経済効果があるかが先行して、知的興味をあまり抱かないような社会システムがあるのかもしれない。アメリカやヨーロッパの大学卒業者と話すとき、ずいぶんいろいろなことをよく知っているし、知的レベルが高いと思います。日本の社会は大学教育を軽視してきたのではないのでしょうか。

—— 大学教育が役に立たないといわれてきたのは、企業の求める人材像とのミスマッチもあるのではないのでしょうか。

**学長** 企業の採用条件として、コミュニケー

の学会は白人ばかりで、黒人はほとんどいませんでした。ところが今は白人があまり見当たりません。お父さんがヒスパニックであったり、お母さんが東南アジア系であったり、いわゆる白人、黒人でない人たちが多くなっているんですね。社会の構造が変わってきているということを実感しました。

## 観光産業を発展させる

—— 観光産業学部について伺います。

**学長** 二〇〇八年に開設しました。森田孟進前学長のご努力で学部ができる前から取り組みが進んでいて、法文学部の観光科学科として学部ができる前にスタートし、経営学科と一緒にできてきたのが観光産業科学部です。観光科学科の一期生卒業生に合わせて二〇〇九年に大学院を開設しましたが、まだマスターコースしかありませんので、ドクターコースをつくりたいと思っています。観光産業を発展させるためにも新しい観光学が必要だと思っています。

—— 副専攻制度について伺います。

**学長** 以前から実施していますが、学士力が問われているときに、副専攻でうまくいくのかという問題があります。少し見直しが必要かもしれません。卒業生の質の保証をしっかり行います。

むしろ、専攻のレベル、専門教育のレベルをしっかりと上げていく。そのための対策が必要だと考えています。

シジョン能力というものがよく挙げられていますが、コミュニケーション能力は、幼稚園くらいの子どものころからの積み重ねがあるんですね。大学になって急にコミュニケーション能力が良くなるなんてことではないはずで

す。幼稚園のころから、勉強はできないけど、ガキ大将で皆を集めているタイプもいるし、勉強はできるけれど、いつも静かに一人であるタイプもいます。こうした問題は、昔からあった問題のほうです。

むしろ、こうしたことをコミュニケーション能力の問題として取り上げているところに問題があるのではないのでしょうか。適材適所に配置するという姿勢が本来は必要だと思えます。しかし、今学生や教職員を含めてメンタルヘルスはいろいろな問題を含んでいます。われわれも大学として、しっかりと取り組んでいるところですよ。

## 国際水準の沖縄学を発信

—— 先ほどインターナショナル・ジャーナルの話が出ましたが、国際交流の取り組みについて伺います。

**学長** 学術誌は「JIOS: International Journal of Okinawan Studies」といいます。最近では各地に地名を冠した〇〇学があります。沖縄学は昔からあります。というのは、沖縄は元々独立した王国であり、歴史、文化、社会など、様々な点で独立した

文化があり、一つの国をつくっていったことから、沖縄学として研究されてきました。インターナショナル・ジャーナルですから、きちんとレビューがあります。本学以外にも、ハワイ大学、コロンビア大学など様々な大学の人が加わっています。投稿論文のレベルが低いトリジェクトして載せません。

次はジェンダー関係の特集を組むことになっています。なぜジェンダーを取り上げるのかというと、ジェンダー学は白人女性の始めた学という面があると思います。でも、アジアやアフリカの女性の問題は少し違うところがあって、アジアの歴史と文化の中で起こっている問題を白人のジェンダー論と一緒に議論するのは少し違うのではないかとということ。宗教や風俗など社会環境にかなり違ったものがあると思うんですね。

インターナショナル・ジャーナルですから、白人の女性も執筆しますし、様々な国の女性が執筆することになります。少し違った視点のジェンダー学を考えてみてもいいのではないかとことです。大学は今後ますますジェンダーの問題に取り組む必要があります。教職員の何%女性だとか、男女共同参画室を設置するといったことも大事ですが、もっと内容の充実、そして大学らしいジェンダーの取り組みを考えています。

それから、沖縄県の県民の好意で、ラオス大学に附属小学校を寄付しました。低開発諸国には、日本のいろいろな市民団体が、小学校などを多く寄付していてそれは大変良いこ

とですが、その際に教育をする人の問題が考慮されていないということがあります。われわれは小学校を寄付するだけでなく、そこでの教育者を支援していくモデル校をつくる取り組みをしています。さらに、中国やアジアの国々と様々な交流を行っています。

### 留学生も一緒にの宿舎で「国際性」を身に付ける

——留学生の受け入れの取り組みについて伺います。

学長 留学生はそれほど多くありませんが、それでも宿舎が足りず、建てることにしました。その際に、留学生も本学の学生ですから、日本人の学生と同じ宿舎に入れるように言いました。それで、日本人学生と外国人留学生在が混住して国際化を推進するというので、混住棟と呼んでいます。私は琉球大学の学生宿舎でいいじゃないかと言っています。日本人の学生も外国人の学生も皆一緒にの宿舎へ入った方が力がつきますし、本学の目標である「国際性」にも通じます。

### 地域医療と観光を結ぶ

——地域社会貢献と産学官の連携の取り組みについて伺います。

学長 産学官連携については、県内の企業は非常に小規模ですから、なかなか難しいところがあります。地域医療との関係で、医療ツーリズムとい

会という組織をつくり、学生支援のための活

## 良いものを伸ばす方向が大事

——優秀な学生を集めるための方策と広報活動について伺います。

学長 優秀な学生を集める方策についてはですが、日本の大学入学試験は入学試験のための試験になってしまっていますから、本当に能力のある学生を選んでいるのか、少し疑問があると思います。教員にはいろいろなところで、自分たちが発見したことや研究の面白さをできるだけ魅力的に語るようにお願いしています。そうすることによって、学問の面白さに気がつくような良い学生が入学してくるのではないかと思っています。われわれの教育や研究や地域貢献を、もっと魅力的に宣伝していこうと思っています。

大学のホームページも文字ばかりで興味が持てなく読まれていませんでしたから、画像を中心としたものに変えました。また、空港をはじめ様々なところに本学のポスターも出しています。

——他県出身の学生はどのくらいの割合になりますか。

学長 約四割が他県出身ですが、学部学科でずいぶん差があります。学科によってはほぼ全員が県外ということがあります。例えばサンゴ礁について研究している海洋自然科学科の生物系は県外からの学生がほとんどです。

う観光と一緒になった事業なども考えているところ。沖縄県の地域産業ビジョン策定（内閣府）でいろいろ検討しました。今後の発展を考えています。

### 新しい発想の地域医療へ

——沖縄は離島が多いですから、地域医療への貢献が重要になってきますね。

学長 非常に大事です。医学部ができる前から様々な取り組みが進んでいます。主な方策の一つは村立や町立の診療所に医者を確保することです。非常に高い給料を出して、村長や町長が一生懸命に探してきます。もう一つは通信システムを使って、離島から症状や必要な情報を送ってもらい、こちらから指示を出して対応できるようにする。それからヘリコプターを使って搬送する方法もあります。実は、どれもなかなかうまくいっていません。うまくいっているはずはありません。なぜうまくいかないかというと、医療というのは人と人のかかわりが基本ですから、人が直接手で触れなくてはうまくいきませんので、通信システムだけではなかなか満足はいかないところがあります。それから医師が一人では、手術など複雑な医療はできませんので困るのです。

大学でも若い人に離島や僻地の診療に興味をもってもらうように取り組みを進めていますけれども、そうした診療所では普段は医師

動も行っていません。

本学の情報発信は県内向けが多いですし、どうしてそうなるのか、よく解析できていない部分があります。しかし、レベルの高い研究が行われていると情報が伝わるのかもしれない。

——学長のリーダーシップについて先生のお考えをお伺います。

学長 リーダーシップには、大きく二つ、トップダウンとボトムアップがあります。トップダウンといっても、皆さんがやっていることをしっかり理解し、その上立って運営を進める必要があると思います。皆さんがやっていることから、良いものをどんどん推し進めるといって方向でないとうまくいきません。これは、一般的にはボトムアップと言われますけど、良いものを伸ばす方向性をとることが大事です。同時に成果がまだ出ていない分野を支援して大学の活性化をはかる必要があります。

学長として重要なことは大学の運営です。運営には財政が大きな問題になります。どのようにして大学の最も大切な使命である教育・研究の経費を確保するかが大切です。対策を立てるに当たっては具体性として先取性が重要です。

の力量が求められる仕事が少ない、若い人が行っても勉強にもならないし、毎日退屈すると思います。日常的におじいさん、おばあさんの血圧を測ってあげて、「元氣ですか」と言っているくらいです。ところが、そのおじいさんが重篤な病気を起こした場合、一人では手術などはできません。そこが問題なのです。今、地域医療学講座をつくらうとしていますが、従来とは違う発想で地域医療をやらないといけないと思っています。やり方としては、医療基地をつくって、離島も都市部と同じレベルの医療を受けられるようにするしかないと思っています。そのシステムの構築を、今考えています。

### 低所得家庭の学生の支援が課題

——学生生活支援の取り組みについて伺います。

学長 特に支援が必要なのは、年収が二〇万円以下の低所得の家庭の学生です。プライベートですから、なかなか調査できないのですが、非常に人数が多いことがわかっています。授業料免除等に取り組んでいるのですが、十分にやろうとすると大学のお金が足りなくなります。

——大学ばかりの責任ではなく、社会全体の責任として取り組む必要があると思います。

学長 経済的な問題と意欲の問題がありますが、大学として、できる範囲で一生懸命取り組んでいるところです。教職員が学生支援護